

盛巖寺之碑(十六)

いしづみ

三陸町吉浜

木村正継



この津波に関する地元史料として、一、六二二名の死亡者が、一冊にまとめられた、盛岩寺の過去帳や十三回忌に一六四九名の戒名と俗名が書かれた供養の為の掛け軸等があります。

(大正二年の大火事の時に、お寺が最初に類焼し、全集落に拡大した際、吉浜に掛けていた住職達に代ってお寺の奥様とお手伝いさん二人で過去帳等と共に畑に埋めて守った物)

根白真称寺の過去帳、又大船渡市役所の隣、洞雲寺

は、気仙郡関係の犠牲者五、七〇五人の名前(外何名の記載もあり)を一枚に記載した、高さ三m位の巨大位牌があり犠牲の凄まじさを伝えています。

当時の新聞記事や、荒木

が書かれており津波の分だけでも、B4原稿用紙十三枚分の長大な記録です。

古文書解説はNHK学園古文書講座講師、大船渡市在住の渡辺兼男先生です。

※親鸞上人越後配流旧跡縁起(今回割愛)付(つけたり)明治二十九年三陸大津波被害記録大掛軸・抜粋
時明治二十九年六月十五日、旧暦五月五日午後八時

者、負傷者多く、帰るべき家もなし、細(糞)の河原となり、嘆き悲しめども帰るべき事にあらず。

食するに一粒の粟も無し朝夕の飯にも飢え、苦しみ飢渴に及び、只、南無阿弥陀仏の外もなし。……

天皇両陛下より御救値金(ごきゆうじゆつきん)岩手県へ金壹万円、宮城県へ金三千元、青森県へ金千円

指令長官に命令を与え、軍艦龍田号、和泉号等を派遣した。

・救援金の緊急支出の御裁可・東十字社より負傷者救護の医員の派遣・各郡各村の被災状況・大津波罹災者凡そ七万余人、飢渴に迫る者三万人。

・唐丹の被害状況・被害の前日漁獵を営みたる艀船三艘は、翌日無事に帰り、昨日と替り唐丹町も石河原となり入るべき家もなし、親族朋友も一人もなし、夢見し有様也。

其船は、三光丸、桂川伊勢松所有、金毘羅丸、稲荷丸は、佐久間莊太郎所有、いずれも危き大難を遁(のがれ)れたり。

唐丹町流失の跡へ、大石を打擲置ぬるよし、是を以津波の高、式丈五尺(二十五尺)七、五メートルと見受、又、大木に掛たる藻屑を以知るべし。……

・人足を履い、一時救護をなしぬ、憐れと言うも余りありぬ。

(次回に続く)

海嘯記念碑(三)

時明治三十有九年

太陰五月五日遭難

田橋堂著「五葉の怪傑」や生出泰一著「つなみ」山下文男著「哀史三陸大津波」外、色々な史料があります。今回は大石の屋号上方(わかた・上野和彦氏現在大船渡市在住)所蔵の大掛軸を紹介します。

前半分には、親鸞上人のことが、後半に津波のこと

半頃、三陸地方海岸凡(おおよそ)百里余の間、大津波に掛け老児男女のへだてなく、三万余人、牛馬成(いぬ)猫に至る迄、流失死亡惨状筆紙に尽くし難く、月ふる間に折角貯造したる金銀財宝、家、蔵、納屋、漁船に至る迄、押流し、藻屑となり、跡に生残りたる

を下賜され、東園侍従を現地視察に派遣、宸襟(しんきん)を悩ませたり。侍従自身、成るべく人民の迷惑とならない様、質素を旨として草鞋履きで旅装し、仔細に視察したので被害者は、そのお心に感泣しな

海軍省は、横須賀鎮守府